

平成23年度採択プログラム 中間評価調書
 博士課程教育リーディングプログラム プログラムの概要 [公表]

機関名	京都大学	整理番号	A01
1. 全体責任者 (学長)	※共同実施のプログラムの場合は、全ての構成大学の学長について記入し、取りまとめを行っている大学(連合大学院によるもの場合は基幹大学)の学長名に下線を引いてください。 (ふりがな) まつもと ひろし 氏名・職名 松本 紘 ・ (京都大学総長)		
2. プログラム責任者	(ふりがな) あわじ としゆき 氏名・職名 淡路 敏之 ・ (京都大学理事(教育担当)・副学長)		
3. プログラム コーディネーター	(ふりがな) かわい しゅういち 氏名・職名 川井 秀一 ・ (京都大学大学院総合生存学館・学館長)		
4. 類型	A <オールラウンド型>		
5.	プログラム名称	京都大学大学院思修館	
	英語名称	Graduate School of Advanced Leadership Studies, Kyoto University	
	副題	社会的課題解決のための現地実践型リーダー育成ワークベンチ	
6. 授与する博士学位分野・名称	京都大学博士(総合学術)、(英語名称)Ph.D.		
7. 主要分科	(①) (②) (③) ※ 複合領域型は太枠に主要な分科を記入		
	本学の全研究科に係る分科が対象		
8. 主要細目	(①) (②) (③) ※ オンライン型は太枠に主要な細目を記入		
9. 専攻等名 (主たる専攻等がある場合は下線を引いてください。)	総合生存学館総合生存学専攻、文学研究科歴史文化学専攻、教育学研究科教育科学専攻、法学研究科法政理論専攻、経済学研究科経済学専攻、理学研究科数学・数理解析専攻、医学研究科医学専攻、社会健康医学系専攻、薬学研究科薬科学専攻、工学研究科高分子化学専攻、社会基盤工学専攻、化学工学専攻、農学研究科応用生命科学専攻、地球環境科学専攻、情報学研究科知能情報学専攻、数理工学専攻、生命科学研究科高次生命科学専攻、地球環境学、経営管理研究部・教育部経営管理専攻、化学研究所、エネルギー理工学研究所、経済研究所、こころの未来研究センター、学際融合教育研究推進センターをはじめ、担当者所属以外の研究科専攻等も対象		
10. 共同教育課程を設置している場合の共同実施機関名	なし		
11. 連合大学院として参画している場合の共同実施機関名	なし		
12. 連携先機関名(他の大学等と連携した取組の場合の機関名、研究科専攻等名)	なし		

(機関名: 京都大学 類型: オールラウンド型 プログラム名称: 京都大学大学院思修館)

14. プログラム担当者の構成 計 46 名			
外国人の人数	2 人	[4.3%]	女性の人数 4 人 [8.7%]
プログラム実施大学に属する者の割合 [87.0 %]			
プログラム実施大学に属する者	40 人	プログラム実施大学以外に属する者	6 人
そのうち、他大学等を経験したことのある者	30 人	そのうち、大学等以外に属する者	6 人

15. プログラム担当者					
※他の大学等と連携した取組(共同実施を含む)の場合: 基幹大学に所属するプログラム担当者の割合 [%]					
氏名	フリガナ	年齢	所属(研究科・専攻等)・職名	現在の専門学位	役割分担 (平成25年度における役割)
(プログラム責任者) 淡路 敏之	アヅノ トシキ		副学長・理事(教育担当)	海洋物理・気候科学 理学博士	プログラム責任者として学位プログラムの全体運営を遂行し、責任を持つ。
(プログラムコーディネーター) 川井 秀一	カワイ シュウイチ		総合生存学館・総合生存学専攻・特定教授	農学、森林学 農学博士	プログラムコーディネーターとして全体調整し専任教員として学生指導等を行う。
(プログラム担当者)H25.1.8追加 大鳥 幸一郎	オホトリ ヨウイチロウ		副学長・環境安全保健機構長・総合生存学館・総合生存学専攻・特定教授	有機反応化学 工学博士	プログラム担当者として学生指導等を行い、コーディネーターの補佐役となる。
小寺 秀俊	コテラ ヒデトシ		理事(渉外・参官学連携担当)	マイクロシステム 博士(工学)	プログラム担当者として、学生指導及びカリキュラム開発等の全体運用を行う。
藤田 正勝(H25.1.8追加)	フジタ マサカツ		総合生存学館・総合生存学専攻・教授	哲学・倫理学 博士(文学)	プログラム担当者として学生指導等を行う。
泉 拓良(H25.1.8追加)	イズミ タクラ		総合生存学館・総合生存学専攻・特定教授	考古学、文化財学 修士(文学)	プログラム担当者として学生指導等を行う。
小山 哲(H25.1.8追加)	コヤマ テツ		文学研究科・歴史文化学専攻・教授	西洋史 修士(文学)	プログラム担当者として学生指導等を行う。
鈴木 晶子	スズキ ショウコ		教育学研究科・教育科学専攻・教授	教育哲学・思想史 文学博士	プログラム担当者として学生指導等を行い、研究科内の調整役を担当する。
林 信夫(H25.1.8追加)	ハヤシ ノブオ		副学長・総合生存学館・総合生存学専攻・特定教授(H26.4.1)	基礎法学 法学士	プログラム担当者として学生指導等を行う。
洲崎 博史	スザキ ヒロシ		法学研究科・法政理論専攻・教授	商法・保険法 法学修士	プログラム担当者として学生指導等を行い、研究科内の調整役を担当する。
IALNAZOV, Dimiter Savov(H25.1.8追加)	イアルナゾフ デミター サボフ		総合生存学館・総合生存学専攻・特定教授	経済学 博士(学術)	プログラム担当者として学生指導等を行う。
大石 眞(H26.4.1追加)	オオイシ マコト		総合生存学館・総合生存学専攻・教授	憲法学・立法学 法学博士	プログラム担当者として学生指導等を行う。
河合 江理子(H26.4.1追加)	カワイ エリコ		総合生存学館・総合生存学専攻・教授	異文化コミュニケーション・グローバル人材育成 MBA	プログラム担当者として学生指導等を行う。
山口 栄一(H26.4.1追加)	ヤマぐチ エイチ		総合生存学館・総合生存学専攻・教授	物理学・イノベーション政策科学 理学博士	プログラム担当者として学生指導等を行う。
金村 宗(H26.4.1追加)	カネムラ ユキ		総合生存学館・総合生存学専攻・准教授	経営学 博士(経営)	プログラム担当者として学生指導等を行う。
趙 亮(H26.4.1追加)	チョウ リョウ		総合生存学館・総合生存学専攻・准教授	離散最適化・アルゴリズム工学 博士(情報学)	プログラム担当者として学生指導等を行う。
森脇 淳	モリワキ アツシ		理事補(教育担当)、理学研究科・数学・数理解析専攻・教授	代数幾何学 理学博士	プログラム担当者として学生指導等を行い、研究科内の調整役を担当する。
光山 正雄(H25.1.8追加)	ミツヤマ マサオ		総合生存学館・総合生存学専攻・特定教授	基礎医学 医学博士	プログラム担当者として学生指導等を行う。
稲垣 暢也	イナガキ ノブヤ		医学研究科医学専攻・教授、副附属病院長	糖尿病・栄養内科学 医学博士	プログラム担当者として学生指導等を行い、研究科内の調整役を担当する。
川上 浩司	カガミ コウジ		理事補(研究担当)、医学研究科・社会健康医学系専攻・教授	薬剤疫学 医学博士	プログラム担当者として学生指導等を行い、研究科内の調整役を担当する。
竹本 佳司	タケモト ヨシジ		薬学研究科・薬科学専攻・教授	有機合成化学 薬学博士	プログラム担当者として学生指導等を行い、研究科内の調整役を担当する。
田村 正行(H25.1.8追加)	タムラ マサユキ		工学研究科・社会基盤工学専攻・教授	自然災害科学 博士(工学)	プログラム担当者として学生指導等を行う。
前 一廣(H25.1.8追加)	マエ カズヒロ		工学研究科・化学工学専攻・教授	化学工学 博士(工学)	プログラム担当者として学生指導等を行う。
阪井 康能	サカイ ヤスヨシ		農学研究科・応用生命科学専攻・教授	応用微生物学 農学博士	プログラム担当者として学生指導等を行い、研究科内の調整役を担当する。
縄田 栄治(H25.1.8追加)	ナワタ エイジ		農学研究科・地球環境科学専攻・教授	環境農学 農学博士	プログラム担当者として学生指導等を行う。
西田 豊明(H25.1.8追加)	ニシダ トヨアキ		情報学研究科・知能情報学専攻・教授	知能情報学 工学博士	プログラム担当者として学生指導等を行う。
中村 佳正(H25.1.8追加)	ナカムラ ヨシマサ		理事補(教育担当)、情報学研究科・数理工学専攻・教授	応用数学 工学博士	プログラム担当者として学生指導等を行う。
垣塚 彰	カキヅカ アキラ		生命科学研究科・高次生命科学専攻・教授	分子医学 医学博士	プログラム担当者として学生指導等を行い、研究科内の調整役を担当する。
勝見 武(H25.1.8追加)	カチミ タケ		地球環境学堂・学舎・地球親和技術学館・教授	地盤工学 博士(工学)	プログラム担当者として学生指導等を行う。

リーダーを養成するプログラムの概要、特色、優位性

(広く産学官にわたりグローバルに活躍するリーダー養成の観点から、本プログラムの概要、特色、優位性を記入してください。)

本事業の主旨(博士課程教育リーディングプログラムの事業スキームより抜粋)

日本が復興、成長し、世界の中で存在感を保ち続けるためには、今日の危機と人類社会の課題克服を先導し、持続可能で活力ある新たな社会システムの構築にリーダーシップを発揮する人材が必要



そのようなリーダー人材育成のあり方を突き詰めた結果、3つの根本的な問題意識に行き着いた。

- 学生と教員双方の人間性が深く作用し合う「顔の見える全人格的な教育体制」こそが本質
- 今求められるのは社会の現場において他者と協働する課題解決のための実践
- 真のグローバル化は、国際標準の知識と智慧をもち、場所を選ばない



これを受けての本プログラムの考え方(育成したい人材像)

社会的課題解決のために今求められている人材は、高い使命感・倫理観を有するグローバルリーダーとしての責任を持ち、種々のプレッシャーに耐え、広い知識と深い専門性を両立させた柔軟性ある思考で既存の学問や課題領域を束ねることができ、かつ国内外での豊富な実践教育を通じて、「現場」での的確な判断力・行動力を備えたリーダーたる人材である。



分野を問わずフィールドワークを得意とし世界的な研究成果を数多く産んできた総合大学

このような京都大学の強みを活かした独自の育成手法(抜粋)

- 国内外のトップ機関におけるサービスマスター型の実地実践教育を通じた世界観の醸成と人間力の強化
- 全員が教員と共に日常生活をともにし、精神面・意識面からの成長を実現するための学寮制
- 相談役だけでなく責任を持って担当学生を育成・評価する後見人としてのメンター制度
- 産業界、行政、国際機関からのリーダーを講師に招く学寮制度を活かした「熟議」の開催
- 幅広い知識の獲得を目指した総合学術基盤講義(八思)と国際機関等と連携による実践力獲得のための海外実践教育など、学生の問題意識に沿ったテラーメイド型教育制度
- 2年次と3年次修了時にそれぞれ専門研究と知識に関する学位論文予備審査及び進学審査を実施し、合格者のみを“特任研究員”として、海外の実地実践教育(武者修行)に派遣
- 4年次は一年間にわたる海外での武者修行に従事することで、知識や研究で培った能力を総合して現場での経験を積む。
- 最終年度(5年次)は、学生自ら社会の中で多様な行動を起こすプロジェクトベースラーニング
- 学位審査:修了要件を満たし最終審査を経た者に学位(総合学術)を授与するほか、学位記に京都大学大学院思修館プログラムの修了を記す。これにより、企業や行政機関の博士人材起用を促す。

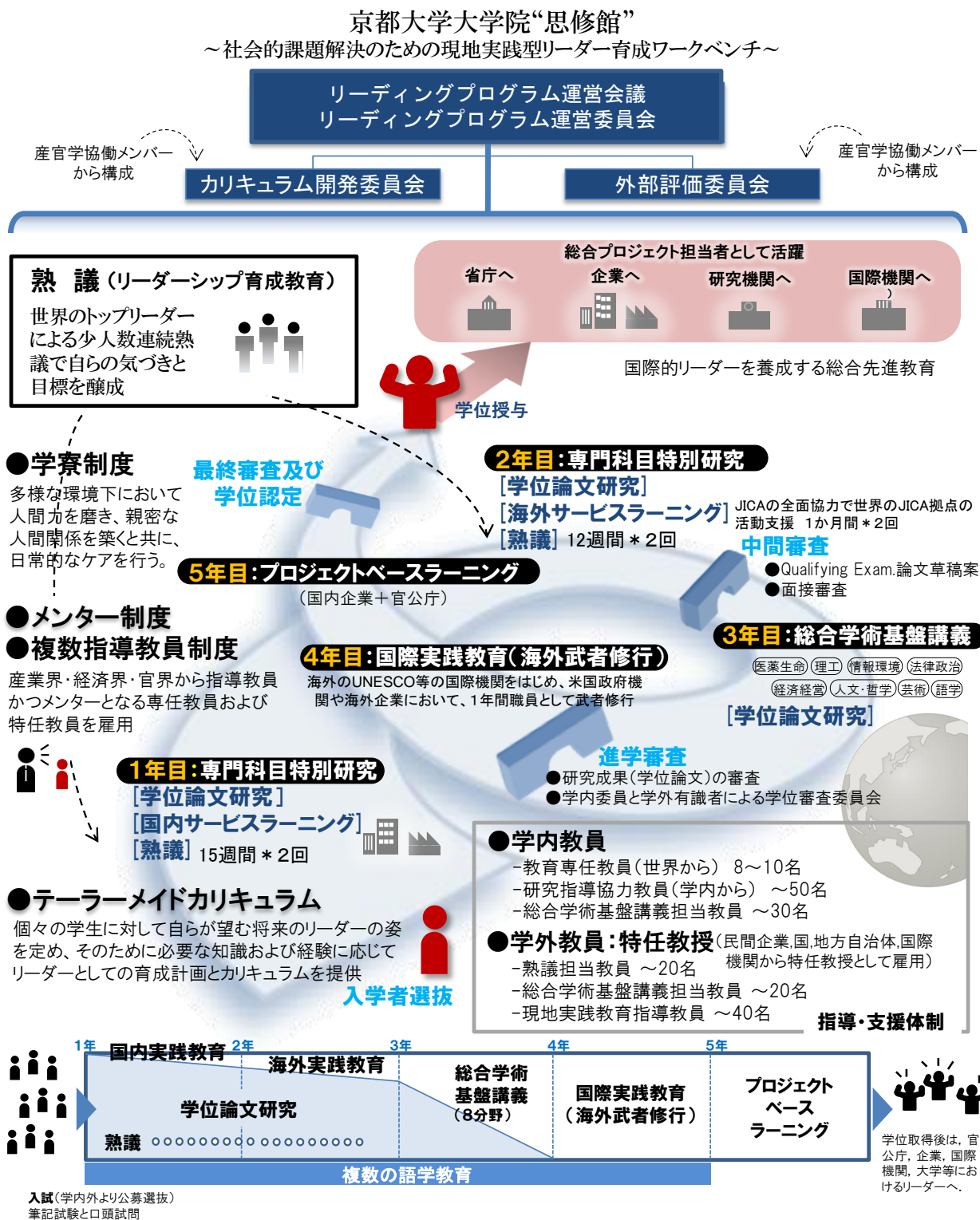


その手法を達成するための組織体制

- 運営組織:博士課程教育リーディングプログラム運営会議及び同運営委員会を設置し、本プログラムをはじめ、学内のリーディングプログラムを大学として一括管理運営
- 教員体制:適切な教員を学内外から集めるための組織と人事関係規則を制定。各界トップを経験し、人格・識見に優れた指導者を産業界、官界、国際機関から専任教員あるいは学外講師(特任教員)として招へい。学内からは専任教員の他、兼任教員及び総合学術基盤講義担当教員の措置を整備
- プログラム評価制度:国内外のトップリーダーからなる外部評価委員会及びアドバイザリーボードの設置。成果報告会(フォーラム)を開催し、一般市民を対象にパブリックコメントによる評価を実施。修了時及び5年、10年経過後に、修了生をはじめ、上司や所属長を対象にアンケートを実施し、どのような人材として評価されているかを調査
- 新設大学院“総合生存学館(思修館)”の設置。本プログラムの実施主体として平成25年度設置。

学位プログラムの概念図

(優秀な学生を俯瞰力と独創力を備え広く産学官にわたりグローバルに活躍するリーダーとして養成する観点から、コースワークや研究室ローテーションなどから研究指導、学位授与に至るプロセスや、産学官等の連携による実践性、国際性ある研究訓練やキャリアパス支援、国内外の優秀な学生を獲得し切磋琢磨させる仕組み、質保証システムなどについて、学位プログラムの全体像と特徴が分かるようにイメージ図を書いてください。なお、共同実施機関及び連携先機関があるものについては、それらも含めて記入してください。)



「博士課程教育リーディングプログラム」中間評価結果

機関名	京都大学	整理番号	A01
プログラム名称	京都大学大学院思修館		
プログラム責任者	北野 正雄	プログラムコーディネーター	川井 秀一

(評価決定後公表)

(総括評価)

一部で計画と同等又はそれ以上の取組もみられるものの、計画を下回る取組であり、本事業の目的を達成するには、助言等を考慮し、一層の努力が必要である。

[コメント]

リーダーを養成する学位プログラムの確立については、本プログラムは、「生存知の構造化と公共化」を対象とする総合学術である「総合生存学」を確立、実践しようとするプログラムであると同時に、教育プロセスも非常にユニークなものであり、大学院教育の一つのあり方を示すものとして期待されているが、基盤となるべき「総合生存学」の定義、概念が抽象的であり、既存研究科との関係整理も含めて大学執行部並びにプログラム担当者による更なる検討・議論が不可欠である。

産学官民参画による修了者のグローバルリーダーとしての成長及び活躍の実現性については、各界のリーダーを講師として招いて実施する「熟議（講師による講義、問答、ディベート演習）」などをきっかけとして、学生同士の相互啓発によるグローバルな課題についての研鑽が盛んに行われ、学生がグローバルリーダーとして着実に成長しており、今後の活躍が期待される。

グローバルに活躍するリーダーを養成する指導体制の整備については、専門的知識の習得に加え、「八思（総合学術基盤講義）」の教育などにより総合的な知を学び俯瞰力を培い、複合的社会課題解決能力を育成しようとするきめ細かな教育プログラムが学生各自に対して用意されている。また、学生同士が緊密な人間関係を築き、互いに切磋琢磨できる合宿型研修施設を備えた寮制度などリーダー育成のための環境が整えられ、大学の支援体制が充実していることなど、多くの点で高く評価できる。一方、グローバルなコミュニケーション能力涵養や国際性の向上を図るための外国人担当教員の増員等、早急な対応が求められる。

優秀な学生の獲得については、学生の専門性は幅広い分野に渡っているが、多様な背景を持つ優秀な学生が切磋琢磨しあう環境という意味からも応募者数、及び留学生数の増加が課題である。女性の学生数についても更なる増加が望まれる。

世界に通用する確かな質保証システムについては、明確な履修要件が定められ、厳格な進級資格試験が行われていることは評価できる。一方、「総合生存学」の学問的、実践的アチーブメントの評価方法の確立が不明瞭であるため、まず学理を定め、博士課程として相応しい明確な評価基準、審査方法が確立される必要がある。

事業の定着・発展については、全研究科の協力を得てプログラムが運営されており、大学執行部の積極的関与も約束されている。今後は、本プログラムを新しい大学院教育のモデルとして確立し、大学全体の教育改革に結び付けていく更なる努力が求められる。